

# 日本の推理小説の中国語訳について

三 宅 良 隆

作家・松本清張の『点と線』が、1977年の5月に、香港にある天地圖書有限公司から長篇推理小説『點與線』というタイトルで単行本として出版されている。＜興は接続詞で…と…の意味＞

訳者は晏洲という人で、経歴などについては不明であるが、あとがきの「松本清張と彼の推理小説」によると、「十数年前の夏、私は初めて九州へ行き、しばらく住んだ…」とも書いてあり、相当、日本にも精通し、日本語にも堪能な知識人と思われる。

原文と対照しながら読んでみると、原文の目撃者に始まる13の見出しは、本文中にもそのまま訳出して見出しとしてあり、また、文中の会話や手紙文を含めて原文に忠実で、良心的な翻訳と思った。

なお、博多のもと警察官鳥飼重太郎が、東京警視庁の三原警部補殿あてに出した手紙と、三原警部補が鳥飼重太郎様あてに出した手紙を訳するに当ってはそれぞれの立場等を考慮し、異った書簡文体を用いるという配慮もしている。

しかし、厳密に言えば、下記のように、原文に――をほどこした箇所が翻訳されていない。

この海岸を香椎潟といった。昔の「櫃日の浦」である。太宰帥であった大伴旅人はここに遊んで、「いざ子ども香椎の潟に白砂の袖さえぬれて朝菜摘みてむ」(萬葉集卷六)と詠んだ。

しかし、現代の乾いた現実には、この王朝の抒情趣味を解さなかった。寒い一月二十一日の朝六時半ごろ、一人の労働者がこの海辺を通りかかった。彼は、「朝菜を摘む」かわりに、家から名島にある工場に出勤する途中であっ

た。

この数節は、いわゆる情死と考えられた男女二つの死体が、その労働者によって、海岸で発見されるところの情景を描いた最初の部分であるが、このように、歴史上の文学的資料を文中にちりばめて、小説に潤いと魅力と真実性を持たせる手法は、松本清張作品の特徴でもあるので、上記の部分が訳出されていないことは、『点と線』という作品が表現力にも勝れ、文学性もある推理小説と思われるだけに残念である。

また、文学作品の翻訳というものは、情緒的な面も含めて、原文の意味を忠実に再現し、翻訳された作品自体が、また一つの創造的芸術作品であるべきであると考えれば、それだけ読者の感銘を殺ぐことになるので、望ましいことではない。

しかし、上記の箇所は中国語に訳しにくいところである。大伴旅人とはどんな人物であったのか、万葉集とはどんな書物であるのか、ということについても予備知識が必要であるし、五七五・七七という日本特有の抒情詩についてもその鑑賞力がなければ理解が困難である。

中国人の読者に、そこを、いくらかでも理解してもらうためには、別に注解とか用語の解説を必要とするだろう。しかし、知識の伝達を目的とする学術論文などとは違って、小説に、いちいち、注解をつけるわけにはゆかないと思う。また、この推理小説としては、ぜひとも挿入を必要とする部分でもない。

なお、もう一つの例として、時間表マニアの安田亮子の随筆を引用するところで

徒然草に「名を聞くより、やがて面影は推しはかる心地するを」という文句があったことを覚えているが、私の心も同じである。

という原文のあたりを訳してないのも、徒然草とはなんであるかがわからない大多数の中国人にとっては、そのまま直訳しても興味がないと思ったからであろう。

私たちが外国の文学作品を味う場合、直接原文で鑑賞できるのは、極めて限

られた人であり、大部分の人は、翻訳を通じる外はない。そこに翻訳の重要性があるのだが、いかに、原文を尊重した逐語訳をしても、翻訳文は原作の完全な等価物でありえない以上、そこには限界があるといわなければならない。

翻訳といっても、翻案、重訳、意識、抄訳、逐語訳など、いろいろの種類があり、それぞれ、歴史的な必要にも答えてきたわけであるが、『點與線』の場合は、そのうちの何れに属するのであろうか。私見としては、「部分不訳」或は「一部不訳」(partial untranslation)とでもいうべきではないかと思う。これは、両国の異った言語の特徴に基く、翻訳技術上の一部字句の省略とは違ったものであるからである。

推理小説は、その性格上、訳者が自分勝手の軽率な判断で、原作の内容を省略して発表することは許されない。訳者の晏洲は、その点については十分に心得ていて、伏線を尊重する反面、推理してゆく上での手がかりに直接の関係がなく、同時に自国人にとっては難解な、日本の文学的資料が含まれる部分を削ったのである。つまり、詩の部分を散文に直すことの困難性を考え、その部分を削ったのである。

これは無情な措置であるが、翻訳文というものは、これを受ける側からすれば、わかり易いものでなければならない、という見地からは、むしろ、一般中国人の読者に対しては、親切な考慮であったと思うのである。

いま、仮りに、中国の小説を日本語に訳して発表する場合、その小説のなかに詩があれば、それをいわゆる漢詩として、書き下し文に直して載せても、日本人の読者にとっては不自然ではないが、逆に、例えば、日本の小説のなかにある短歌や俳句などを中国語に訳すことは、甚だ困難性があり、その情緒がそのまま中国人に伝わらない恐がある。これは一つの国の人たちの、他の国の人たちとの文化的背景の相違や、それぞれの原文の内容に対する理解度の深浅によるものであろう。「点と線」の内容は、私たち日本人にとっては、あたりまえの文化的背景であるが、この背景には、中国人にとっては異質な面が存在しているわけである。言葉を換えていえば、中国人の日本文学に対する理解度は、その反対の場合よりも距離があるのが現状であろうと思う。

なお、訳者はあとがきのなかで、松本清張と彼の推理小説について、相当、詳細に、好意的な解説をしており、松本清張の作品は（内容亦有一定的社会意義）としていて、特定のイデオロギーからの批判的見解は見当らない。

また、この翻訳小説の文体は、現代において、広く中国人の間に普及している標準語で書かれているが、活字の配列は、中国本土の方式と違って従来どおりの縦組みであり、全面的に、簡体字（略字）を使用していないのは、この小説本が香港で出版されているためである。

なお、一部不訳という翻訳方法に関連して次のことを付記したい。

昭和15年7月30日、新潮社から、佐藤春夫選で『支那文学選』（新日本少年少女文庫）が発行されたが、その巻頭に中国の魯迅の小説『故郷』の翻訳文が、「ふるさと」という題で掲載されている。そして、その解説で佐藤春夫は次のとおり述べている。

これは魯迅という近代の支那が生んだ最も大きな文学者の書いた『故郷』という短い小説を年の若い皆さんに読んでもらうために、途中の一節と最後の理窟っぽいところなどを略して、二人の幼な友達の話だけを主にしたのです。

（以下略）

そのようなわけで、この翻訳小説は、原作者の意図に反するかも知れないが一部不訳の好例だと思う。

要するに、明確な目的意識を持たない翻訳上の省略は、自由訳となる恐れもあるので警戒を要する、と指摘したいのである。